ジョセフ・コンラッド『闇の奥』

『闇の奥』
――ディスコミュニケーションの闇のむこう

坂井 真紀子

「地の奥底」へ降りるような不穏な旅、だが同時にそれは「一種の光を投げかけてくる」体験だったとも言う。一八九〇年、若きコンラッドは、世界への好奇心に突き動かされ、船長としてコンゴ川流域の奥地で病に倒れた貿易会社の社員の救助に赴いた。彼は、船乗りマーロウに『闇の奥』でこの体験を語らせている。この作品は、賛否両論、おおいに物議を醸した。帝国主義の非人道的な搾取の実態を告発し、人間性の闇を暴き出したと絶賛される一方で、白人至上主義の域を出ないとのしんらつな批判もある。作者は結末を読者に大きく委ねている。時代とともに評価は大きく変化しうるだろう。

裏を返せば、本作はさまざまな読み方が可能だ。例えば、若きマーロウ船長の暗黒大陸冒険譚として。あるいは「優秀な上級社員」クルツがコンゴの闇の奥で狂気に飲み込まれていく恐怖小説として。クルツは象牙獲得で異様な才能を開花させ、地域住民に恐れられ崇拝され、欲望の闇に飲み込まれていく。

帝国主義時代のヨーロッパ、膨張する投機熱に浮かされ、ステレオタイプのアフリカで一攫千金をねらう人々が、暗黒の熱帯雨林に吸い込まれていく。その時代の空気を感じることも可能だ。儲かる大事業となれば、ベルギー領であろうがフランス領であろうが、ロシア、オランダ、イギリス、欧州各国の商人が暗黒の森林に交易品を携えて出かけていく。東アフリカのザンジバル人も登場し、大陸を縦横にめぐる当時の活況ぶりがうかがえる。

当時、アフリカ交易が職の選択肢として普通に存在したことは興味深い。それは高邁なキリスト教的理想とセットになり広く一般に受け入れられていた。コンゴでの就職先を繋いでくれた叔母に、「無知蒙昧な人たちを忌わしい風習から引き離すため」に彼がコンゴに行くことを称賛され、マーロウはやんわりとお金儲けなのだと返す。この何気ない会話が、パリの客間の絨毯を伝ってするりとコンゴの熱帯雨林の奥までのびている様が、なおのこと闇の深さを際立たせる。

角度を変えると暴走する資本主義のおぞましい構造的闇が浮かぶ。本土に還元しきれない資本の投資先としてのアフリカ、象牙ビジネスによる莫大な富の創出、そのためにおびただしい数の地域住民が駆り出され、使い捨てられていった現実。熱帯雨林の奥地で累々と積み重なるゾウの死骸。システムの暴走が招く地獄絵図である。その地獄に集まったのは、国民国家の崩壊とともに、欧州本土に居場所を失った多くの人々モッブたちだ。それは、ポーランドの貴族出身のコンラッドであり、貧しい出自のクルツである。本作は、さまざまな角度から光を入れると、プリズムのように乱反射する。だが、光の通らない角度が一箇所だけ存在する。それは森の奥に住む人々の日常である。マーロウは、コンゴ川の霧から聞こえる太鼓の音色について考えるが、その意味は掴めない。人々の咆哮も、無数の無言の眼差しが意味するところも。これまで受けてきた教育、従ってきた秩序、常識という物差しがまったく役に立たず、暗闇をただ凝視し、彼はそのわからなさを抱き締める以外に術がない。その恐怖たるや。他方、森の奥から蒸気船を伺う側はどうだろう。白い人たちが火を吐く筒を携えて突然やってきた時、どんなに恐ろしかったことか。彼らは言葉が通じず、理不尽に暴力を振るう。なぜこんなにも多くの象を殺し、象牙を集めるのか。だがクルツはここに場所を得た。樹林の奥で、クルツは彼らとどのような関係を紡いだのか。本作が切り込めなかったこの死角、ディスコミュニケーションの闇、痛みや共感の深い欠落こそが闇の奥(Heart of darkness)だとすれば、時代を経ても私たちの中に闇は常に存在する。その闇と対峙する覚悟があるか、一九世紀の彼方から問われている気がしてならない。

さかい・まきこ
総合国際学研究院教授　アフリカ地域研究／農村社会学

文献案内

ジョセフ・コンラッド『闇の奥』改版、岩波文庫、中野好夫訳、二〇一〇年